

〈研究ノート〉

先輩留学生を活用した大学院進学コースの 取り組みと課題

浅井 尚子

要 旨

大学院在籍の留学生は、年々増加傾向にある。拓殖大学別科日本語教育課程でも大学院進学希望の留学生は、増加している。大学院受験留学生に対する本別科の主な取り組みとしては、①必修選択科目コース別日本語における大学院進学クラスの設置 ②大学院進学ガイダンスの開催 ③本別科修了大学院生の大学院進学クラスにおける授業参加の3つがある。

本稿では、③の「先輩留学生のクラス参加」は、大学院受験留学生への支援策として有効であるのかを調査するため、先輩・後輩の両方の立場を経験した大学院生に半構造化インタビューを行った。その結果、大学院進学コースの課題が浮き彫りとなった。今後のメンター制度構築に向けた改善策としていくつかの提案を試みた。

キーワード：先輩留学生 大学院受験留学生 メンター制度

1. はじめに

2012年より、国は高度外国人材の受け入れを促進する「外国人高度人材ポイント制」⁽¹⁾を導入し、出入国管理上の優遇制度を設けている。さらに「未来投資戦略2017」を2017年に打ち出し、2020年末までに1万人、2022年末までに2万人の高度外国人材認定を目指している。

こうした背景もあり、大学院在籍の留学生も増加傾向にある。文部科学省の『学校基本調査』によると、最近5年間の留学生の大学院修士課程入学人数は、2014年7,666人（全体に占める割合10.5%）、2015年7,789人（10.8%）、2016年8,225人（11.4%）、2017年8,659人（11.8%）、2018年9,576人（12.9%）と、年々増加している。

拓殖大学別科日本語教育課程（以下、本別科とする）においても大学院を目指す留学生が増える傾向にある。筆者は、現在、大学院を目指す留学生のクラスを担当している。大学院受験留学生が増えるに従い、一部に具体的な研究目的がないまま、大学院進学を目指す留学生が見受けられた。また、名の通ったいわゆるブランド大学院であれば、どこでもかまわないといった学生も目立ってきたように思われる。

こうした学生への指導のあり方を模索するため、浅井（2018）では、大学院在籍の留学生へのインタビューを通し、実際にどのような受験準備を行い、現在どのような大学院生活を送っているかを探った。その中でいくつかの困難点とその克服法について把握することができ、困難を克服する場合、母語で相談できる先輩留学生たちの存在が大きいことが明らかになった。

そこで、本稿では、本別科の大学院受験留学生への支援策を再考し、大学院進学指導での先輩大学院生の活用について、検討することにした。

2. 大学院受験留学生への支援策再考の背景

2.1 拓殖大学別科日本語教育課程（本別科）の大学院進学希望者への指導と取り組み

本別科においても、『学校基本調査』の結果同様、大学院進学者数は、増加している。修了生全体に占める大学院進学者数の割合は、5年前の2013年は、修了生46名中3名（6.5%）だったのに対し、2017年は、修

了生 83 名中 15 名（18.0％）と約 3 倍となっている。今年度（2018 年度）の 6 月の本別科による「希望進路調査」では、大学院受験留学生は全体の 23.9％を占めていた。

増加傾向にある大学院受験留学生に対して、本別科では主に次のような取り組みを行っている。

- ①選択必修科目コース別日本語における大学院進学クラスの設置
- ②大学院進学ガイダンスの開催
- ③本別科修了生の大学院進学クラス参加

以下、取り組み内容について簡単に紹介する。

①選択必修科目コース別日本語における大学院進学クラスの設置

本別科では、週 2 回月曜日と水曜日の 3 限を選択必修科目の授業（合計 180 分）とし、学生は、進路や目的に合わせて、開講科目⁽²⁾の中から自由に一つのクラスを選択する。

大学院進学クラスもその一つである。クラスにおいては、進学先希望調査を行い、学生の希望に合わせた個別指導を行っている。

大学院受験に向けたスケジュールを立て、その計画に従い、次のような点について、授業時間内及び時間外に準備を進める。

- 1) 研究テーマの設定
- 2) 資料検索
- 3) 志望校の情報収集
- 4) 大学院進学説明会・オープンキャンパスへの参加
- 5) 研究計画書・志望理由書の作成
- 6) 専門科目・日本語の試験対策
- 7) 大学院指導教員へのコンタクト
- 8) 面接の練習

- 9) 出願必要書類の準備・点検
- 10) 合格後の提出書類の準備・点検

教員は、それぞれの学生の個別相談に応じ、担当の教員間で情報を共有する。必要であれば、日本語以外の科目担当教員に相談するといった内容で授業を進めている。大学院受験留学生の専門が教員の専門分野以外の場合は、修了生や他の教員などに相談することもある。

②大学院進学ガイダンスの開催

2018年度は、春学期で大学院進学ガイダンスを3回開催した。

実際に大学院の教員から大学院の具体的な説明を受けることにより、大学院受験留学生が受験準備をより早くスタートさせることを目的に行われている。2018年度は、次のような方法でガイダンスを行った。

- ① 拓殖大学大学院からの教員を招き、大学院全般についてのガイダンスを行う
- ② 大学院教員から各研究分野や研究科についての具体的な説明を聞く
- ③ 個別相談を行う

双方向型のプレゼンテーションや実際の講義を映した動画などで、大学院受験留学生も具体的に大学院をイメージできたようである。

③本別科修了大学院生の大学院進学クラス参加

大学院進学クラスでは、学期中に数回、大学院に進学した本別科修了生たちに大学院進学クラスに参加してもらっている。そこで自らの受験の体験・大学院生活を語ってもらい、大学院受験留学生の相談にもものってもらっている。

体験談を聞いた後、相談時間を設けるが、全体での相談は少なく、学生たちは、「良かった」「先輩はすごいです」などの感想を言うにとどま

る。個人的な相談は、皆の前で話しにくいといった理由が考えられる。また、性格的に皆の前では恥ずかしいと思ってしまう学生もいると考えられる。そこで「個別に母語で相談してもいい」と教師が言うと、奨学金のことなど細かい点まで具体的に相談していた。

先輩留学生に母語で相談することは、大学院受験留学生にとって言語的・心理的な負担が少ないと考えられるが、その活用の有効性ははっきりしていない。先輩留学生の活用が、果たして大学院受験留学生にとって必要な支援策となりうるのか。大学院受験留学生にとって、先輩留学生の存在は、どのようなものなのか。すでに大学の初年次教育などにおいて取り入れられているメンター制度は、③の「本学科修了生の大学院クラス参加」に近いものであると考えられるが、本別科では、大学院受験留学生の支援策として整ったものとなっていない。

本別科修了大学院生の人数は多くなく、さらに大学院受験留学生の志望研究科も多岐にわたるため、マッチングが非常に難しい。現在のところ、大学院進学クラスで一斉に体験談を聞いているが、学生によっては、興味ない研究科の話もあり、授業時間を有効に使えていない場合もある。

大学院受験留学生にとっての支援策としてメンター制度の構築は、必要であるとする。メンター制度構築のため3つの取り組みのうち、③の「本別科修了生の大学院クラス参加」について注目し、先輩留学生の活用のあり方について、考察したい。

2.2 先輩学生あるいは社会人を活用した先行研究

鳥根大学総合理工学部では、先輩の上級生をメンターとして捉え、メンター制度を実施している。メンターとは、仕事・人生における「助言者」「指導者」「相談相手」などと訳される。メンティーと呼ばれる支援やサポートを必要とする人をメンターが助ける制度をメンター制度あるいは、メンタリング・システムという。1980年代にアメリカで人材育成の手法

として取り入れられ、日本でもすでに企業の OJT で用いられている。先輩社員がメンターで、新入社員や後輩はメンティーと呼ばれる。メンター制度は、企業では、先輩社員が後輩に対して、業務やメンタル面でサポートをする制度のことであるが、大学においても初年次教育（尊鉢・吉田 2013）やキャリア支援教育において導入されている。

前述の島根大学総合理工学部ホームページには、メンター制度について次のような記載がなされている。

総合理工学部では、入学者の多様化を背景として、新入生を対象にメンター制度を実施。メンターは特定の領域（コミュニティ）において知識、スキル、経験、人脈などが豊富で成功体験を持ち、後輩の目標人物像として、指導・助言などを行う。TA と違い、メンターは教員のアシスタントではなく、自らの経験に照らし合わせながら、新1年生に教育的な働きかけを行う。

渡辺（2005）は、高等教育におけるメンタリング・プログラムを5つの類型（①学内教職員による在学生支援型 ②学内メンターによる在学生支援型 ③在学生による在学生支援型 ④学内メンターによる学内職員キャリア支援型 ⑤在学生メンターによる小中高校生支援型）に分類している。

さらに、小森・木間（2017）は、昭和女子大学での社会人メンター制度導入の調査から、渡辺（2005）の5類型に加え、「卒業生・先輩研究員がメンターになるケースも散見される」とし、「社会人メンター制度によってメンター・学生双方に良い効果をもたらしている」としている。昭和女子大学では、学生間・学内関係者にとどまらず、公募による信頼できる社会人をメンターとして取り入れている。2016年の時点で、354名のメンターが学生にプロフィールを公開しているが、昭和女子大学のOGの比率

は16.1%で8割以上は同窓生ではないという。メンターを公募で募り、プロフィールを公開することについては、困難もあるだろうが、実際に300名を超えるメンターを確保し、メンターシステムが構築され、大学教育を活性化させているという点は、学ぶべき点であろう。また、小森・木間（2017）は社会人メンター制度について「①メンティーがメンターを選び、②固定的・継続的ではない助言を対面で受ける、③1対1の個別メンタリング以外に、複数のメンティーとメンターが交流できるプログラムが用意されているシステム」としているが、②と③は注目すべき点だ。4人のメンターに40名の学生が与えられたテーマに沿ってお茶を飲みながら懇談するメンターカフェや出入り自由なメンターフェア等の取り組みは先駆的である。固定的・継続的ではなく、複数で交流するプログラムが用意されているという点は、メンター・メンティ双方の心理的負担を軽くしていると言えよう。また、様々な相談体制を整えることで、より多くの学生が積極的に参加できる機会を大学側が提供している。本別科にも取り入れることのできる相談体制はあるのではないだろうか。

大友（1998）は、留学生がどのような相談を誰にするかという点について調査しているが、「同国人同士が相談相手として選ばれる場合がほとんどだった」としている。教師に話す内容は言語習得に関することで、プライベートなこと、特に経済的なことなどは話しながらない傾向であるという。

三枝（2005）は、大友（1998）の調査結果を受け、「教師として進路指導をする場合、学生が問題のすべてを話していると考えるのは危険」とし別科生について、次のように述べている。

別科生は、「教師」「親」「知人」に相談しているが、先行研究の結果からその相談内容は異なる可能性も高い。今後、相談相手によって進路相談内容に違いがあるかについて調査が必要である。そして、相談

内容が違うのであれば別科生の現状や希望をより詳細に知るために別科生の人的ネットワークを把握するとともに、そのネットワークにかかわっているアドバイザーなどの知人とも連絡を取り、指導することが有効であるとする。(三枝 2005 : 119)

三枝の指摘は重要である。メンター制度が採り入れられれば、別科生もよりよい進路を選択できるのではないだろうか。

別科生に関する論文は、授業方法や学習に関するものがほとんどで、進路に関する調査は少ない。また、別科でメンター制度を取り入れている例は、見当たらない。メンター制度を整えるにあたって、どんな問題があるのかという点を明らかにするために先輩・後輩として両方の立場を経験した大学院生から聞き取り調査を行った。

3. 調査方法

3.1 調査目的

本別科修了大学院生を活用した大学院進学コースのメンター制度・サポート体制構築のための方法を探ることを目的とする。先輩・後輩両方の立場を経験した大学院生に、半構造化インタビューを実施し、メンター制度・サポート体制構築のための問題点を明らかにする。

3.2 調査協力者

今回分析の対象としたのは、次の3つの条件を満たす3名の調査協力者の発話である。

- ① 本別科修了の大学院生
- ② 過去に先輩の話を大学院進学クラスで聞く、あるいは、本別科修了生を紹介された学生

- ③ 自分自身も大学院生になって、別科の大学院進学クラスで後輩たちに実体験を話した学生

上記の先輩・後輩の両方の立場を経験している学生は、本別科の進路サポートについてもより広い視野で捉えることができると考えたからである。3名の背景は表1の通りである。

表1 調査協力者の背景

		大学院学年	年齢	性別	出身地	専攻
1	調査協力者 A	大学院 2 年	20 代後半	女性	非漢字圏	文系
2	調査協力者 B	大学院 1 年	20 代後半	男性	非漢字圏	文系
3	調査協力者 C	大学院 1 年	20 代後半	男性	非漢字圏	美術系

3.3 調査方法・内容

調査協力者に調査者（筆者）が対面し、半構造化インタビューを行った。インタビューは、2018年8月に1名につき、1回行った。時間は、平均して一人、60分程度であった。

まず、調査協力者に調査の概要（使用目的・内容）について伝え、次に、個人情報侵害する恐れがないこと、プライバシーは保護すること（資料は匿名化すること）、研究以外の目的では使用しないことを伝え、全員から了解を得た。

調査者が、インタビューでの発話を IC レコーダーに録音し、メモを取りながら、話を確認していった。メモと照らし合わせながら、録音した発話を文字化し、それを分析資料とした。フィラーやあいづち、言いよどみ、いい間違い、文法の明らかな間違いなどは加工し、内容をまとめた。

分析は、大谷（2007）を参考に SCAT の分析シートを使用し、文字起こしたテキストをセグメント化し、分析データとして用いる。大谷

(2007) は「SCAT は一つだけのケースのデータやアンケートの自由記述欄などの、比較的小規模の質的データの分析にも有効である。」と述べている。

インタビュー終了後、再度、研究目的の使用に関して、調査協力者に確認を取り、全員の了承を得た。

インタビュー内容は、以下の通りである。

- 1) 日本の大学院を選択し、入学した理由
- 2) 進路選択の際の困難点について
- 3) 進路選択の際の相談者について
- 4) 相談する際の使用言語について
- 5) 相談内容について
- 6) 進路決定時に使用したツールについて
- 7) 以前別科生だった時に聞いた先輩の話について
- 8) 先輩への相談の際の使用言語について
- 9) 先輩の話は進路決定に影響したか
- 10) 相談のあとの連絡について
- 11) 自分が先輩になり、後輩にアドバイスした感想
- 12) 後輩の個人相談の際の使用言語について
- 13) 後輩の相談内容について
- 14) 後輩からのその後の連絡について
- 15) これから受験する人へのアドバイス
- 16) 本別科の進路相談についての感想
- 17) 進路に関するサポートについて

以上から、①大学院選択・決定に関するカテゴリー、②先輩との関係のカテゴリー、③後輩との関係のカテゴリー、④本別科の進路サポートに関する

るカテゴリーに分け、該当する箇所を抽出し、3名のインタビューを分析した。（調査協力者の語りの部分は、太字斜め字で示す。自国の名前をそのまま使用している部分は、自国・同国人などに書き換えを行い、意味を取り違えるような明らかな語彙・文法の間違ひは調整したが、できるだけ調査協力者本人の語りを尊重し、記述した。）

4. 調査結果

4.1 調査協力者 A の事例

①大学院選択・決定に関するカテゴリー

調査協力者 A は、来日前より、日本での就職を考え、日本語学校選択の前に大学院進学を決めていた。将来を見すえて、現在の研究科を選択している。

【ずっと日本語を勉強してきて、いい仕事に就くには、もう一つの専門が必要だと思っていて、日本にきた目的は大学院に進学することでした。】

【別科を選ぶ前に大学院に入ろうと決めていました。】

大学院選択にあたっては、「今住んでいるところから近い」ことも選択基準になっている。その理由として「大学院の手続きの煩雑さ」を挙げていた。日本人の受験生に比べ、提出書類も多く、書類に翻訳をつけることなどが必要になってくるからではないだろうか。

また、大学院選択にあたっての相談者として、本別科の教員と同国人の先輩を挙げ、家族には相談していない。

【別科の先生です。他にはいないです。家族の中でもなんか私の専門、大学に時からずっと日本語専門だったので、なんか家族の中で、留学について、なんか詳しい人はいないです。全くいないです。なので、家族からは全くアドバイスもらってなかったです。全部は別科の先生と相談して、それから自分で決める。ですね。はい。家族には結果だけ。】

②先輩との関係のカテゴリー

本別科教員が紹介した2名の先輩留学生とは、試験のことについて相談している。また、そのうちの1人は友人の姉で、会う機会が多いこともあり、相談しやすかったのではないだろうか。

【あー先輩。先輩は同国人の先輩。今他の研究科に通って研究している先輩になんかアドバイスもらって、はい。そのきっかけは、先生が連れてきてくれたので、「あ、同国人だ。」って。「会ってよかったです。」って先輩にいろいろなことを聞きました。はい。】

【その人は別科の友達のお姉さんですので、ちょうど、妹に会いに来た時にちょうど私もそこにいましたので、はい。】

相談の内容としては試験の内容である。また、メールアドレスを交換しているが、その後メールでは、連絡していない。会う機会が多いので、会ったときに、知りたいことだけを聞くというスタンスである。

【具体的には試験はどんな風に行われたのか？ 合格の決め手は、面接か筆記試験かそういうことです。はい。あとは面接の時、注意すべきこと。試験の内容とか。それです。】

【あの、研究科が違いますので、入ってからのことは、聞いてもあんまり参考にならないと思って。】

【他の人は、もうひとり。先生に紹介していただきました。ラインも交換して。先生が紹介してくれてから、そのあと一回？ そのあと一回だけかな？ ラインで話しました。】

【1回で十分です。まあ、自分で調べたら、他のアドバイスとかはそんなに必要じゃないと思います。】

SNSで簡単に繋がれる時代であるが、あまり連絡を取っていないというのは予想外であった。

研究科が違う場合、あるいは同国人ではない場合、必要なことを聞いたら、それで十分ということである。Aの場合、他の大学院進学クラスの

学生よりも研究計画書を早めに書き上げていたこともあり、先輩からの影響については次のように述べている

【特になかったです。はい。目的はもうこれだって決まったので。いろいろなことを悩んでる人だったら、まあアドバイスが、すごい、まあなんていうか、参考になると思いますが、私は、その前に全部研究計画書も完成させましたので、先輩から、ただ、参考になったのは、面接。あれが一番参考になった。】

③後輩との関係のカテゴリー

後輩へのアドバイスは、「難しかった」と語っている。言語の問題ではなく、後輩たちに問題があり、目的意識のない後輩たちに何をアドバイスしたらいいか迷ったようだ。

【一番難しかったのは、みんなだいたい何をやりたいのか、ほとんどは決まってないですよ。（笑）ほとんど決まってないです。すごい悩んで、自分の目的はちゃんとわかってないので、アドバイスとかをあげるのは、すごい難しかったんですよ。はい、ちょっと広すぎて。】

【相手はちゃんと目的を決めてないので、私のアドバイスが参考になったかどうか。はい、ちょっとわからないです。】

【ずっと母国語で話してて、みんなうーん、一番基本的なことは、大学院に入りたいのか入りたくないのかで、まだ決めてない。】

さらに、学費の話もしているが、それほど大きな問題ではなかったと語り、研究計画書についての質問に答えていた。

【ただ、難しいんじゃないですか。どの研究科に入るか、まだ決めていないので。研究計画書を書きたいってことは無理。あ、無理です。（笑）自分の研究したいテーマもちゃんと決まってないし、（笑）ただ、研究計画書のこういう流れがありますよ、ただ、それだけ。目的、背景とか基本的な部分がこれだけです、それだけについて話しました。何について研

究したいのか全く分からなかった。もう一人については、ある研究科は仕事に限られているということは言いました。それを聞いて、悩んでいます。私の研究科は、分野が広いので、いろいろなところで働けるっていうアドバイスをあげて、それをきいて、ちょっと悩んでいました。あとは、入ってからの勉強、はい、そうです。大学院に入ってからどうやって勉強するのか、はいそうです。】

ここでも相談者の進路がはっきり決まっていなくて、具体的なアドバイスができなかったと述べている。さらにアドバイスをしてみて、「最終的には何をしたいか、自分にしかわからない。アドバイスは聞いても決定するのは自分だ。」と気づく。アドバイザーの役割については、「自分の経験を伝えるだけ」と語った。

④本別科の進路サポートに関するカテゴリー

本別科の進路サポートは今のままで十分だと語っているが、アドバイザーの役割として、自分の経験を伝える以外に「促し」を挙げていた。調査協力者 A は、次のように述べている。

【1 番は、目的を明らかにすること、2 番は日本語能力を高めること。3 番目は計画書を書いて準備をやって、手続きを早くやっておくことです。それができたら、必ず合格すると思います。研究計画書は、はやくたぶん 2 ヶ月以内に書きましたけど、手続きは先生がいないとできなかったんです。(笑) 手続きは、怠けて間に合うかな? と。ちょっとだるーいって。やっぱり先生がいないと (笑)】

4.2 調査協力者 B の事例

①大学院選択・決定に関するカテゴリー

調査協力者 B は、来日当初は大学院進学の高い希望があったわけではなかったが、日本で相談でき、信頼できるロールモデルの存在により、大学院

で研究しようと考えようになった。

専攻分野を選択する時には、大学の時の専攻分野と違う分野を選択したため、専攻分野と日本語の勉強の仕方が分からず、困難を感じていた。困難点については、別科の教員に相談している。

【一つは本当に私、専門は全然わからない専門でした。先生たちはどうやって教えますか。それが一番困ったことと、あと日本語の問題。私、日本に来て、日本語とか、日本人の態度とかほんとに大好きになっています。建前じゃなくて、本当です。でも、大学院の先生はどうやって教えますか。日本語はわからない。そんなことで、ずっと困りました。別科の先生たちに相談しました。別科の先生たちは本当にいろいろ教えてくれましたから。本当にありがとうございます。担任の先生と、大学院クラスの先生に相談しました。】

大学院に入るときに相談したのは、本別科の教員と日本にいる親戚で、国の家族には相談していない。

国では、日本へ行くことイコール働くことだという。そのためには、「学校で寝ても構わない」というイメージができあがってしまい、調査協力者Bも来日当初は、そのような生活をしていた。それについては後悔している。しかし、信頼できるロールモデルの存在により、大学院進学を志すようになる。

【私、国で日本語学校2か月くらい学校通ったけど、先生たちは、「日本では、学校で寝て、他の時間は働きます。」と言った。だけど、こっち来たら、全然違います。こっち来たら、勉強することは一番大事、必要です。それで勉強した。日本の文化とかも勉強して本当に面白いと思った。私こっち来るときは、親戚いましたから。博士、国立大の。よく勉強している人だから、彼に「勉強しないといけない」と言われた。「じゃあ、私頑張ります」と思って。私の国のイメージは、日本に来たら、学校で寝て、それはだめじゃなくて、お金のために働くイメージありますから。日

本からすると、私の国のイメージはどんどん悪くなる。今は本当に。】

【来た時、もっと勉強すれば、良かったと思っています。今は後悔。日本語ができない下のクラスの時は、日本語ができなくても生活できると思ってた。】

②先輩との関係のカテゴリー

秋学期から大学院進学コースに入ったため、先輩の大学院進学クラスでの話は聞いていない。本別科の教員が、同国人の大学院生を紹介したが、その時は先輩大学院生からすぐに連絡は来ず、大学院に入ってから、連絡が来ている。その後は特に困ったことがなく、先輩大学院生と連絡を取っていない。大学院の履修で困った時には、先生や先生から紹介された日本人に相談して相談している。連絡が取れなかった理由として、SNS の利用法の相違を挙げていた。

【あーその時は連絡来なかった。大学院決まってから、連絡来てあの時しました。今同じ授業。フェイスブックで連絡しましたが、返事遅いです。たぶん使ってなかった？】

③後輩との関係のカテゴリー

後輩からの質問は大学院生活と大学院試験のことに集約される。また、本別科の教員にはあまり聞かない学費についても聞かれている。後輩へのメッセージはうまくは伝えられなかったとふり返っている。

【先輩になることは本当に大変なこと。大変だった。言いたいことも良く言えなかった。日本語で。でもでも、初めてそんな先輩になったから、緊張しました。学生も私の専門を勉強したい学生は1人しかいなかった。その人も授業はどうやって取りますかとか、試験問題はどんな感じに書きますかとか聞きました。他の人は、大学院の授業はどうやって先生から教えてもらいますか。論文はどうやって書きますか。それだけ。】

【私の専門に入ろうと考えている学生からは、学費。他より、ちょっと高いですから。あと。担当の先生はどうやって選びますか。どのくらい書きますか。書かなければなりませんか。英語でもできますか。試験のこと。それしかあんまり聞かなかった。】

個別相談した学生からの連絡がないことについては、大学院受験留学生の計画性のなさを挙げていた。

【ないですよ。何かあったら、連絡してくださいって言ったけど、受験までにまだ時間があると思っています。連絡先も教えましたけど。】

④本別科の進路サポートに関するカテゴリー

本別科のサポートシステムについては肯定的に捉え、先輩留学生の活用は、大学院受験留学生にとって自信をつけるきっかけになっているとしている。

【とてもいいと思います。学生たちが、先生たちのことがあまり信じられない場合は、先輩たちに聞いたら、私にもできると思うと思います。あの人できたのに、なんで私できない？ そんな感じもあります。いいシステムだと思います。】

【学生から見たら、先生が言うことはもちろん当たり前です。学生だったら、あの人できたから、私にもできます。自信はもっと高くなりますと思います。】

また、同国人の先輩がいたらよかったと述べていた。調査協力早Bの出身国の学生は少なく、留学生の中でもマイノリティのため、孤独感も感じている。しかし、それを否定的に捉えるのではなく、日本人とコミュニケーションをとることにより、日本語の向上につながると考えている。

【同国人の先輩がいたらよかったと思いますけど。別科で勉強しているときも同国人のグループがあって何かあったら、グループがありますね。今もそうですけど、私は1人。それはちょっと寂しいね。時々。でもい

い時もあります。私、他の人と話す時は、日本語だから、それは練習になっていいです。】

【ネットでは、本当のことは書けないと思います。その時、先輩たちと相談するのがいいです。大学院でも最初の時難しい。その人は先輩たちがいるといい。先生もサポートしてくれるけど、母語で相談できるといい。フィーリングと気持ちは、日本語や英語では伝わらない。】

寂しいと感じる一方で、自分から意識的に同国人コミュニティへの参加は控え、積極的に日本のコミュニティに参加している。

【日本に来たら、他の同国人とあまり会っていないです。私の地元からもたくさん日本に来ています。でもあまり連絡しない。なぜか私もわかりません。したいと思っていますけど、ほとんど一人。国の家族や友達、いないと一人。】

【自国のコンサートかフェスティバルとかたくさんありますけど、わたし 本当に行きたくない。よく分かりません。日本のコンサートはよく行ったことがあります。お祭りとか、手伝うために行きました。自国のは、友達大丈夫ですけど、知らない人はあんまり。友達になるには時間がかかりますね。いろいろな言葉聞いて、緊張とか、面倒とか、もっとね、考えすぎになりますから、大丈夫。今は日本の文化好きですから、日本のことを知りたい。日本人とは友達になりたいけど、同国人は大丈夫です。今までの友達で大丈夫です。いい友達いっぱいいますから。】

4.3 調査協力者 C の事例

① 大学院選択・決定に関するカテゴリー

調査協力者 C は、一度母国で職業に就いたのち、父の影響もあり、大学院進学を選択している。

【まあ、昔から日本語ができるということもあって、それに父も日本の大学院を卒業してしまして、父と同じで日本で勉強したいという気持ちは

ずっとあって、それで日本で日本の大学で勉強しようと決めました。】

【やっぱり働いていく中で、人ってなんか新しいことを学びたいって思うんですよ。そこでなんか、自分の専門の分野を広めたいって思ってる。】

大学院に進学したい、もっと視野を広げたいという向上心はあるが、実際の大学院選択の段階で迷いが生じている。

【大学もけっこうたくさんあるし、いろんな先生方もいるし、どうやって選ぶか全然わからなくて、すごく迷いましたね。日本で勉強したいっていう気持ちはあったんですが、具体的に何をやりたいっていうのが、やっぱり決まっていなくて、そこがちょっと大変でしたね。自分の国で何の役に立つのかわからないっていうのが、少し想像しにくいっていうか、あまり想像できなかった。】

大学院を選ぶ時に両親、特に父親に相談している。

本別科で相談できなかった理由としては、自分の専門は経済などの一般的な研究科ではなく、比較的受験者が少ない研究科であること、美術系で専門が違うことなどを挙げている。相談とアドバイスと分けて考え、次のように語っている。

【別科に入って、一人くらいは同じ専門の人がいるかと思ったんですけど、全然みんな違って、ビジネスとか国際とか、先生方も同じ。自分の専門知っている人もいなくて、相談する人もいなくて、難しかったんですね。いろいろアドバイスはもらいました。いろいろ資料出してもらって。】

また、普段相談できる相手がいないので、オープンキャンパスなどに行って大学院の専門分野の教員と話すことの重要性を強調し、進学するうえで心構えの変化についても語っていた。

【直接オープンキャンパスとかに行って、どういった環境で勉強できるのか、研究ができるのか、見に行ったりしました。あと、大学院の有名な先生方とかお話ししたりして。ある程度、役立ちました。ある程度っていうかすごい役に立ちました。(笑) やっぱり会って直接お話するのがいい

のかなって思いますね。教授とは2年付き合っていくわけなので、その人を知ることすごく重要だし、お話できたら、すごいいいことだと思いますし。】

【「あなたがまあ将来自分の国に行って造ったものが、人の役に立つのか、そういうことを考えて研究するのが大事だな」って先生に言われました。で、そういわれて、ただいいデザインをするより、人々のために、自分の国に役に立つものをデザインするのが大事だなんて思いました。】

②先輩との関係のカテゴリー

調査協力者Cは、大学院進学クラスに自分と専門の近い先輩が来て、話を聞いている。研究生に入ってから大学院生になるという選択肢があることを教えてもらい影響を受ける。しかし、結局両親に相談し、研究生でなく、大学院を受けること決めている。

【研究生から始めると、自分の研究、もっとしっかりと、立てられるっていう点かな？ そこで、院生になる前になんか、ある程度を考えて、そこから絞って、後から院生になった時、やりやすいのかなって思っ。やっぱりいきなり院生に入っちゃうと大変で、間に合わなかったり、追いつけなかったりするのがあるって言われたから、確かにそうかもしれないって思いました。】

【一応両親に話したけど、まあいいけど、研究生にならなくてもいいんじゃないかなって、ちょっと時間が無駄じゃないかなって言われました。直接院生になったほうがいいんじゃないって、言われました。だからどっちを選択したらいいのかなって】

また教師と先輩の相談の相違点にも触れている。調査協力者Bと同様に自分にもできるかもしれないという自信をつけるきっかけになっている。

【先生とはやっぱり違う。話している内容はほとんど同じなんですけど、先輩たちから聞くと何だろうな？ 少し違うんです。(笑) やっぱり少し

安心感っていうのかな？ この人たちは、こんな感じで、院生になったんだなって。自分にもできるかなって感じ。親近感かな？ ちょっと違うかな？ 院に入るまで、やってきた人と大体同じようにすればいいんじゃないかなっていう？ 実体験というのかな？ そういうのがある人の方が、やっぱり少しいいんじゃないかなって。】

その後の先輩への連絡については、していない。いろいろ聞きたかったが、連絡先を無くしてしまったと言っていた。調査協力者Cには、父という存在がいるため、先輩に頼る必要がなかったのかもしれない。

③後輩との関係のカテゴリー

調査協力者Cも後輩へは自分の経験を話している。

【先輩として、皆の役に立てるような話ができたらいいなと思って、自分の経験したことだけを話しました。私と皆さん、研究は違いますので、具体的にこういう学校がいいとか、こういう先生がいいとかは言えないし、そうなると自分が院生になったなり方がいいのかなって。どういった経験をしたか、そうやって研究計画書を進めたのかとか、そういう話をしました。大学院に入るのに一番大事なのが、指導教員と事前面談しておくのが、一番大事だと思いました。】

個人面談にも応じているが、その学生とは連絡先を交換していない。代わりに大学院受験留学生と同性の同国人の学生を紹介している。自分のアドバイスについては、大学院受験留学生にとってどうだったかはわからないが、自分でできる限りのことは話したと、評価していた。

【彼女は同じデザインですが、分野が違って。どこの学校がいいか、迷っていたような感じがします。違う国だったので、日本語でアドバイスして。いくつかデザインのある有名な大学を紹介してあげて。彼女は自信がないって言っていて、作品とか見せてもらったんですが、すごくいいし、でも日本語が心配って。】

【アドレスを交換しなかった。だから連絡はないですが、代わりに彼女と同国人の友達を紹介してあげました。同じ国で話しやすいんじゃないかと思って、任せてしまいました。自分よりいいアドバイスしてくれるんじゃないかと思って。】

④本別科の進路サポートに関するカテゴリー

先輩大学院生が体験談を話すことについては評価はしている。しかし、ここでも最終的には決定するのは自分であり、サポートは、受けた人が受ければよいとする考えを述べ、教師の役割も「促し」だとしている。

【結局は進路は自分で決めるんじゃないかな？ ある程度サポートしてもらえるのは大事なんですけど、それはある程度までで、準備っていうか、全部は自分でやっていくのが、自分調べるっていうのが。最終的には自分で決めて、自分が決めることだから。自分で調べて、自分でやったほうがいいんじゃないかな？ 別科のサポートが不十分とかそういうのではなくて。】

【テーマ決めるのは先生じゃないですし、その人が決めることだから、先生がするのはしつけない？ ちゃんとやりなさいってことだけだから。】

5. 先輩留学生を活用した大学院進学コースの課題

以上の事例より、先輩留学生を大学院進学コースで活用するにあたって示唆されたことをまとめる。

- 1) 先輩留学生に相談する場合、先輩留学生と大学院受験留学生との志望研究科や国・地域が違っていると、あまり深いことは聞けず、体験談や試験内容・大学院生活を聞くに留まる。

- 2) 大学院受験留学生は、先輩留学生の話を聞くといったサポート自体は、肯定的に捉え「促し」は必要だとしているが、どんなサポートがあったとしても、最終的には自分自身で決めて自分でやるしかないと考えている。
- 3) 相談の時期が早いと、大学院受験留学生が専攻分野や研究内容を決めていない場合や大学院に入るかどうかも決まっていない場合があり、先輩学生はどうアドバイスすればよいか悩んでしまう場合がある。
- 4) 個人相談の後、連絡先は交換するが、その後は相談することが少ない。異性の場合は、連絡先を交換せず、同国人の同性を紹介する場合もあった。
- 5) 大学院受験留学生は、先輩留学生に、学費や奨学金のことなどを相談している。教師に対しての相談とは違う内容である。また、先輩留学生に相談することで、教師とは違った安心感・親近感がわき、自信が高まるといった一定の効果があると推測される。
- 6) 大学院を選択する時、かつて、大学院に進学したことのある家族や親類がいる場合は相談するが、いない場合は、来日した段階で自分で決めている。

本調査からあらたな課題も浮き彫りになった。まず、一度会った後に頻繁には連絡を取っていないということである。調査協力者Bが述べていたように、たとえ母語が同じでも同国のコミュニティに参加したくないという場合もある。また気が合わなければ、一度しか会ったことがない人にわざわざ連絡を取らない。相手に悪いという気持ちや面倒だということもあるだろう。交流を継続していくためには、ある程度定期的に会える場の提供が必要で、教師などが介入し、そうした「場」を作っていく必要があるだろう。

次にマッチングする際の人と時期の課題がある。先輩留学生のクラス参加が早すぎても遅すぎても大学院受験留学生に有益とはならない。また、先輩大学院生が授業に参加しても大学院に進学するかどうかのような内容では、そこから先に話が進まない。また、尊敬できる信頼できるロールモデルとなる先輩がいれば、大学院受験のモチベーションも上がると考えられるが、なかなかそういう人に巡り合えない。授業に参加する先輩留学生の人数や専攻分野の問題も残る。

最後に相談が母語で行われた場合、教師はほとんど内容がわからないといったことがあげられる。情報共有の仕組みを考える必要があるだろう。

6. 今後に向けた改善策

本稿において、先輩留学生を活用した大学院進学コースの取り組みと課題について考えてみた。

浅井（2018）では、大学院受験留学生にとって、先輩留学生の存在が大きいことが明らかになったが、本稿では、さらに1) 使用言語が同じこと、2) 大学院受験留学生の受験に対する意識が高いこと、3) 家族に詳しく相談できる人がいないこと、4) できれば同性であること、5) SNSなどのメディアを利用した場合よりも直接会う機会が定期的にあること、6) 研究科・専攻分野が同じであることなどが、大学院受験留学生と先輩留学生とのコミュニケーションを促進させ、より良い相談に繋がることが明らかになった。

今後は、大学院とも連携し、先輩留学生を活用したクラス運営を継続的に行い。大学院受験留学生の専攻分野を考慮し、先輩留学生とのマッチングを行っていきたい。また、大学院進学クラスへの先輩留学生の参加回数を増やし、定期的に行えるようになれば、理想的である。本別科でも昭和女子大学が実施している社会人メンター制度の仕組みを取り入れた大学院

生メンター制度を構築し、大学院受験留学生がより相談しやすくなるような環境づくり、ネットワークづくりを試みたい。また、相談が母語で行われた場合、教員には相談内容の共有ができないという問題点を改善するために、先輩留学生・大学院受験留学生・教員の3者が閲覧可能な形のウェブシステムを導入するなどして、記録を残す必要もあるだろう。

今回の調査では、調査協力者に条件があり、条件をクリアする留学生が少なかったため、分析データも限られたものとなっている。今後は、データを増やし、より客観的な結果が得られるようにしていきたい。また、大学院受験留学生にとって、どのような支援策が必要であるか、さらに考察を深め、メンター制度の構築に向けて、研究していきたい。

《注》

- (1) 法務省入国管理機局は、高度外国人材ポイント制度の概要・目的について、「高度外国人材の受入れを促進するため、高度外国人材に対しポイント制を活用した出入国管理上の優遇措置を講ずる制度を平成24年5月7日より導入」しているとし、「高度外国人材の活動内容を、『高度学術研究活動』、『高度専門・技術活動』、『高度経営・管理活動』の3つに分類し、それぞれの特性に応じて、『学歴』、『職歴』、『年収』などの項目ごとにポイントを設け、ポイントの合計が一定点数（70点）に達した場合に、出入国管理上の優遇措置を与えることにより、高度外国人材の我が国への受入れ促進を図ることを目的」としていると記載している。
- (2) 2018年度のコース別日本語クラスの開講科目は、「入門漢字」「初中級漢字」「N4」（日本語能力試験N4に合格するためのクラス）「N3」「N2」「N1」「拓殖大学進学」「大学院進学」である。

参考文献

- 浅井尚子（2018）「大学院進学希望者の受験準備の現状と課題——大学院生の振り返りインタビューから——」『拓殖大学 日本語教育研究』第3号
拓殖大学日本語教育研究所
- 池田朋子・田中敦子（2011）「先輩留学生を活用した理工系専門日本語教育——学習者を支援する教室環境作りの取り組み——」『東海大学紀要国際教

- 育センター』創刊号 東海大学国際教育センター
- 大谷尚 (2007) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案——着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き——」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』54-2 名古屋大学大学院教育発達科学研究科
- 大谷尚 (2011) 「SCAT: Steps for Coding and Theorization——明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法——」『感性工学』Vol. 10 No. 3 日本感性工学会
- 大友可能子 (1998) 「在日外国人留学生カウンセラーについて」『留学生教育』第3号 留学生教育学会
- 小森亜紀子・木間英子 (2017) 「昭和女子大学社会人メンター制度がメンター・学生双方にもたらす効果および今後の課題」『女性文化研究所紀要』第44号 昭和女子大学女性文化研究所
- 三枝優子 (2005) 「留学生の進路決定に関する調査報告」『文学部紀要』第19巻 文教大学文学部
- 桜井美加 (2016) 「大学生メンターによる中学生との人間関係構築に関する研究——関係性攻撃への介入に着目して」『教育学論叢』第33巻 国士舘大学教育学会
- 菅長理恵・中井陽子 (2017) 「エピソードから探る学部留学生の困難点と克服方法——予備教育の果たすべき役割——」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論叢』第43号 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 尊銘隆史・吉田武大 (2013) 「初年次教育における学生メンター制度の意義と効果——関西国際大学の取り組みを事例として——」『研究紀要』関西国際大学教育学部 第14巻 関西国際大学教育学部
- 田中敦子・池田朋子 (2011) 「先輩留学生が参加する中級レベルの専門日本語教育の可能性と問題点」『専門日本語教育研究』第13号 専門日本語教育学会
- 歳岡冴香 (2016) 「留学生とのメンタリングによる英語学習支援の試み」『大阪大学高等教育研究』第4号 大阪大学
- 富谷玲子・門馬真帆 (2018) 「国内の日本語学校における留学生の変質」『神奈川大学言語研究』第40号 神奈川大学
- 中井陽子・菅長理恵・渋谷博子 (2018) 「先輩留学生の体験談を読む活動の実践研究——キャリア形成支援教育を目指して——」『日本語教育方法研究会誌』Vol. 24 No. 2 日本語教育方法研究会
- 渡辺かよ子 (2005) 「高等教育におけるメンタリング・プログラムの構造的特徴

と類型』『愛知淑徳大学論集』第10号 愛知淑徳大学現代社会学部

参考ウェブサイト

文部省『学校基本調査』www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/1268046.htm

（2018年9月7日閲覧）

島根大学総合理工学部「メンター制度の例」

www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/giji/_icsFiles/afieldfile/2011/12/20/1314312_1.pdf

（2018年9月16日閲覧）島根大学総合理工学部「メンター制度」

<https://www.riko.shimane-u.ac.jp/juken/mentor.html>（2018年9月17日閲覧）

愛媛大学 ダイバーシティ推進本部

女性未来育成センター「女性研究者メンター制度」

hime.adm.ehime-u.ac.jp/career/mentor02.php（2018年10月7日閲覧）

昭和女子大学「社会人メンター制度について」

https://univ.swu.ac.jp/career/ca_gakusei-2/menter/（2018年10月8日閲覧）

法務省入国管理局「高度人材ポイント制度とは？」

www.immi-moj.go.jp/newimmiact_3/system/index.html（2018年12月31日閲覧）

（原稿受付 2019年1月10日）